

みつ柏

泉鏡太郎

青空文庫

あらの
曠野

「は、あ、此の堂がある所爲で、陰陽界、石碑にほりつけたんだな。人を驚かしやがつて、悪い洒落だ。」

と野中の古廟に入つて、一休みしながら、苦笑をして、寂しさに獨言を云つたのは、昔、四川都縣の御城代家老の手紙を持つて、遙々燕州の殿様へ使をする、一刀さした威勢の可いお飛脚で。

途次、彼の世に聞えた鬼門關を過ぎようとして、不案内の道に踏迷つて、漸と辿着いたのが此の古廟で、べろんと額の禿げた大王が、正面に口を赫と開けてござる、うら枯れ野に唯一つ、閻魔堂の心細さ。

「第一場所が悪いや、鬼門關でおいでなさる、串戯ぢやねえ。怪しからず霧が掛つて方角が分らねえ。石碑を力だ、右に行けば燕州の道、でもしてあるだらうと思つて見りや、陰陽界は氣障だ。思出しても悚然とすら。」

飛脚は大波に漾ふ如く、鬼門關で泳がされて、辛くも燈明臺を認めた一基、

みちばた路端の古い石碑。其さへ苔に埋れたのを、燈心を搔立てる意氣組で、引るやうに拂落して、南か北か方角を讀むつもりが、ぶるくと十本の指を震はして、威かし附けるやうな字で、曰く「陰陽界」とあつたので、一竦みに縮んで、娑婆へ逃出すばかりに夢中で此處まで駈けたのであつた。が、此處で成程と思つた。石碑の面意を解するには、堂に閻魔のござるが、女體よりも頼母しい。

「可厭に大袈裟に顯はしたぢやねえか」「陰陽界」なんのつて。これぢや遊廓の大門に「色慾界」とかゝざあなるめえ。」

と、大分娑婆に成る。

「だが、恚う拜んだ處はよ、閻魔様の顔と云ふものは、盆の十六日に小遣錢を持つてお目に掛つた時の外は、餘り喝采とは行かねえもんだ。……どれ、急がうか。」

で、兩つ提へ煙管を突込み、

「へい、殿様へ、御免なせいまし。」と尻からげの緊つた脚絆。もろに揃へて腰を屈めて揉手をしながら、ふと見ると、大王の左右の御傍立。一つは朽ちたか、壞れたか、大破の古廟に形も留めず。右に一體、牛頭、馬頭の、あの、誰方も御存じの——誰が御存じなものですか——牛頭の鬼の像があつたが、砂埃に塗れた上へ、顔を半分、べ

たりとしやぼんを流したやうに、したゝかな蜘蛛の巢であつた。

「坊主は居ねえか、無住だな。甚く荒果てたもんぢやねえか。蜘蛛の奴めも、殿様の方には遠慮したと見えて、御家來の顔へ足を掛けやがつた。なあ、これ、御家來と云へばこちとら。其の又家來又家來と云ふんだけれど、お互に詰りませんや。これぢや、なん此方人等だ。其の又家來又家來と云ふんだけれど、お互に詰りませんや。これぢや、なんぼお木像でも鬱陶しからう、お氣の毒だ。」

と、兩袖を擧げて、はたゝと拂つて、颯と埃を拭いて取ると、芥に咽せて、クシヤと圖抜けな嚏をした。

「ほい。」と云ふ時、もう枯草の段を下りて居る、噓に飛んだ身輕な足取。

まだ方角も確でない。旅馴れた身は野宿の覺悟で、幽に黒雲の如き低い山が四方を包んだ、灰のやうな渺茫たる荒野を足にまかせて辿ること二里ばかり。

前途に、さらゝと鳴るは水の聲。

扱は流がある。里もやがて近からう。

雖然、野路に行暮れて、前に流れの音を聞くほど、うら寂しいものは無い。一つは村里に近いたと思ふまゝに、里心がついて、急に人懐かしさに堪へないのと、一つは、水のために前途を絶たれて、渡るに橋のない憂慮はしきとである。

但し仔細たゞしさいのない小川をがはであつた。焼杭やげぐひを倒たふしたやうな、黒焦くろこげの丸木橋まるきばしも渡わたしてある。唯ト、其その橋はしの向むかう際ぎはに、浅あさい岸きしの流ながれに臨まんで、束ね髪たばがみの襟えり許もと白しろく、棲端つまはし折しよりした蹴け出しの薄うすら蒼あをいのが、朦朧もうろうとして其處そこに俯向うつむいて菜なを洗あらふ、と見みた。其その菜なが大根だいこんの葉はとは違ちがふ。

葡萄色ぶどういろに藍あゐがかつて、づる／＼と蔓つるに成なつて、葉はは蓮はすの葉はに肖そつくり如りで、古沼ふるぬまに化ばけもしさうな大おほき蕁じゆんさい菜かたちの形かたちである。

はて、何なんの菜なだ、と思おもひながら、聲こゑを掛かけようとして、一ひとつ咳しはをすると、此これは始はじめて心こ着くろついたらしく、菜なを洗あらふ其その婦をんなが顔かほを上げた。夕間暮ゆふまぐれなる眉まゆの影かげ、鬢びんの毛けも纏もつれたが、目鼻めはな立ちも判明はつきりした、容色きりやうのいゝのを一ひと目見めると、呀あつ、と其處そこへ飛脚ひきやくが尻餅しりもちを搗ついたも道理だうりこそ。一ひと昨年亡をとくなつた女房にようぼうであつた。

「あら、丁ていさん。」

と婦をんなも吃驚びっくり。——亭主ていしゆの亭ていと云いふのではない。飛脚ひきやくの名なは丁てい隸れいである。

「まあ、お前まへさん、何どうして此處こゝへ、飛とんだ事ことぢやありませんかねえ。」
人間界にんげんかいではないものを……と、唯たつた今いま、亭主ていしゆに死しなれたやうな聲こゑをして、優やさしい女に房ようぼうは涙なみだぐむ。思おもひがけない、可懐なつかしさに胸むねも迫せまつたらう。

てこれにつぐるにゆゑをもつてす
 丁告之以故。——却説、一體此處は何處だ、と聞くと、冥土、と答へて、
 私は亡き後、閻魔王の足輕、牛頭鬼のために娶られて、今は其の妻と成つた、と告げ
 た。

飛脚は向う見ずに、少々妬けて、

「畜生め、そして變なものを洗ふと思つた。汝、そりや間男の鬼の腹巻ぢやねえ
 かい。」

婦は、ぼつと瞼を染めながら、

「馬鹿なことをお言ひでない。丁さん、こんなお前さん、ぺら／＼した……」

「乾くと虎の皮に代る奴よ。」

「可い加減なことをお言ひなさいな。此はね、嬰兒の胞胎ですよ。」と云つた。

十度、これを洗ひたるものは、生れし兒、清秀にして貴し。洗ふこと二三度なるもの
 は、尋常中位の人、まるきり洗濯をしないのは、昏愚、穢濁にして、然も淫亂
 だ、と教へたのである。

「内職に洗ふんですわ。」

「所帯の苦勞まで饒舌りやがる、畜生め。」

とづか／＼と橋を渡り掛ける。

「あゝ、不可い、其處を。」と手を舉げて留める間もなく、足許に、パツと火が燃えて、わツと飛び移つた途端に、丸木橋はぢゆうと水に落ちて、黄色な煙が——濛と湧立つ。

「何が、不可え。何だ内職の葉ツ葉ぐれえ。」

女房は、飛脚を留めつゝ驚く發奮に、白い腕に掛けた胞胎を一條流したのであ

つた。

「否、まあ、流した方は、お氣の毒な娑婆で一人流産をしませうけれど、そんな事よりお前さん、橋を渡らない前だと、まだ何うにか、仕様も分別もありましたらうけれど、氣短に飛越して了つてさ。」

「べらぼうめ、飛越したぐらゐの、ちよろ川だ、また飛返るに仔細はあるめえ。」と、いきつて見返すと、こはいかに、忽ち渺々たる大河と成つて、幾千里なるや果を見ず。飛脚は、ハツと目が眩んで、女房に縋着いた。

強ひても拒まず、極り悪げに、

「放して下さい、見られると悪いから。」

「助けてくれ。」

「まあ、私何うしたら可いでせう。……」

と色つぼく氣を揉んで、

「とに角、家へおいでなさいまし。」

「助けてくれ。」

川の可恐しさに氣落がして、殆ど腰の立たない男を、女房が手を曳いて、遠くもな
い、槐に似た樹の森々と立つた、青煉瓦で、藁葺屋根の、妙な住居へ伴つた。

飛脚が草鞋を脱ぐうちに、女房は棲をおろした。

まだ夕飯の前である。

部屋へ灯を點ける途端に、入口の扉をコト／＼と軽く叩くものがある。

白い頬へ口を寄せつゝ、極低聲で、

「誰だい、誰だい。」

「内の人よ。」

「呀、鬼か。」

と怨めしさうに、女房の顔をじろり。で、慌てて寢臺の下へ潜込む。

布で隠して、

「はい、唯今。」

扉を開ける、とスーと入った。とゞろくと踏鳴らしもしない、軽い靴の音も、其の筈で、ぽかりと帽子を脱ぐやうに角の生えた面を取つて、一寸壁の釘へ掛けた、顔を見ると、何と！色白な細面で、髪を分けたハイカラな好男子。

「いや、何うも、今日は闇王の役所に調べものが立込んで、甚く弱つたよ。」
と腹も空いたか、げつそりとした風采。ひよろりとして飛脚の頭の前にある椅子にぐたりと腰を掛けた、が、細い身體をぶるくと振つた。

「人臭いぞ、變だ。甚く匂ふ、フン、ハン。」
と嗅して、

「これは生々とした匂ひだ。眞個人臭い。」

前刻から、手を擧げたり、下げたり、胸に波を打たして居た女房。爰に於て其の隠し終すべきにあらざるを知つて、衝と膝を支いて、前夫の飛脚の手を取つて曳出すと、
もに、夫の足許に跪いて、哀求す。曰く、

「後生でござんす。」——と仔細を語る。

曳出された飛脚は、人間が恚うして、こんな場合に擡げると些しも異らぬ面を擡げ

て、ト牛頭と顔を見合はせた。

(家内が。) (家内が。)と雙方同音に云つたが 〓〓毎々お世話に 〓〓と云ふべき處を、同時に兩方でのみ込みの一寸黙然。

「其の時のよ、己の顔も見たからうが、牛頭の顔も、そりや見せたかつた。」

と、蘇生つて年を経てから、丁飛脚が、内證で、兄弟分に話したと傳へられる。

時に其時、牛頭は慇懃に更めて挨拶した。

「貴方、お手をお擧げ下さい。家内とは一方ならぬ。」と云ひかけて厭な顔もしないが、婦と兩方を見較べながら、

「御懇意の間と云ひ、それにです。貴方は私のためには恩人でおいでなさる。——お前もお聞きよ、私が毎日出勤するあの破堂の中で、顔は汗だらけ、砂埃、其の上蜘蛛の巣で、目口も開かない、可恐く弱つた處を、此のお方だ、袖で綺麗にして下さつた。……お救ひ申さないでおかるゝものか。」

かはれた女
をんな

「故郷を離れまして、皆様にお別れ申してから、ちやうど三年でございませぬ。私は其の間に、それはく……」

と俯目に成つて、家の活計のために身を賣つて、人買に連れられて國を出たまゝ、行方くへの知れなかつた娘が、ふと夢のやうに歸つて來て、死したるもの蘇つた如く、彼の女かをんなを取巻いた人々ひとり／＼に、窶れた姿で弱々と語つた。支那に人身賣買の公に行はれた時の事である。

「……申しやうもござんせん、淺ましい、恥かしい、苦しい、そして不思議な目に逢ひましたのでございませぬ。

國境を出ましてからは、私には東西も分りませぬ。長い道中を、あの人買ひとかひに連れて行かれましたのでございませぬ。そして其の人買ひとかひの手から離れましたのは、此の邊へんからは、遠いか、形も見えませぬ、高い山の裾にある、田舎のお醫師の家でございました。一晩、其のお醫師の離座敷のやうな處に泊められますと、翌朝、咽喉へも通ひませぬ朝御飯が濟みました。間もなくでございましたの。

田舎の事で、別に此と云ふ垣根もありません。裏の田圃を、山の裾から、藜の杖をしい

て、畝路づたひに、私が心細い空の雲を見て居ります、離座敷へ、のそくと入つて來ました、髯の白い、赤ら顔の、脊の高い、茶色の被布を着て、頭巾を被つた、お爺さんがあつたのでございます。私は檀那寺の和尚の、それも隠居したのかと思ひました。

其の和尚が、私の目の前へ腰を屈めて、支いた藜を頤杖にして、白い髯を泳がせ泳がせ、口も利かないで、身體中をじろくと覗込むではござんせんか。

可厭なねえ。

わたしは一層、薬研で生肝をおろされようとも、お醫師の居る母屋の方に逃げ込まうかと思ひました。其の和尚の可厭らしさに。

處が不可ないのでございます。お察し下さいまし。……

私が逃げようと起ちます裾を、ドンと杖の尖で壓へました。熊手で搦みましたやうな甚い力で、はつと倒れる處を、ぐい、と手を取つて引くのです。

あれ、摺抜けようと身を蹴きます時、扉を開けて、醫師が顔を出しました。何をじたばたする、其のお仙人と汝は行くのだ、と睨付けて申すのです。そして、殿様の前のやうに、お醫師は、べたくと唯叩頭をしました。

すぐに連れられて参つたんです。生肝を薬研でおろされる方がまだしもと思ひました、其の仙人に連れられて——何處へ行くのかと存じますと、田圃道を、私を前に立たせて、仙人が後から。……情なさに歩行き悩みますと、時々、背後から藜の杖で、腰を突くのでございますもの。

麓へ出ますと、段々山の中へ追込みました。何うされるのでございませう。——意甚疑懼。然業已賣與無如何——」

と本章に書いてある、字は硬いが、もの柔にあはれである。

「……目を確り瞑れや。杖に掴まれ。言を背くと生命がないぞ。

やがて、人里を離れました山懐で、仙人が立直つて申しました。

然うした身にも、生命の惜さに、言はれた通りに目を瞑ぎました後は、裾が渦のやうに足に煽つて搦みつきまますのと、兩方の耳が風に當つて、飄々と鳴りましたのばかりを覚えて居ります。

可し、と言はれて、目を開けますと、地の底の穴の裡ではなかつたのです。すつくり手を立てたやうな高い峰の、其の上にもう一つ塔を築きました臺の上に居りました。部屋も欄干も玉かと思ふ晁々と輝きまして、怪いお星様の中へ投込まれたのかと思ひまし

たの。仙人は見えませんが、其處へ二十人餘り、年紀こそ五六から三十ぐらゐるまで、いろ／＼に違ひましたが、皆揃つて美しい、ですが、悄乎とした女たちが出て來ましてね、いづれ、同じやうなお身の上でおいでなさいませう。お可哀相でございますわね、と皆さんで優しく云つて下さるのです。

わたしは、わたしは殺されるんでございませうか、と泣きながら申しますとね、年上の方が、否、お仙人のお伽をしますばかりです、それは仕方がござんせん。でも、こゝには、金銀如山、綾羅、錦繡、嘉肴、珍菓、あり餘つて、尚ほ、足りないものは、お使者の鬼が手を敲くと整へるんです、それに不足はありません。毎日の事は勿體ない殿様に擬ふほどのです。其の代り——

其の代り、と聞いただけで身がふるへたではありませんか。——え、其の代り。……何、其だつて、と其の年紀上の方が又、たゞ毎月一度づつ、些と痛い苦しい思をするだけなんですツて——

さあ、あの、其の、思をしますのを、殺されるやうに思つて、待ちました。……欄干に胸を壓へて、故郷の空とも分かぬ、遙かな山の頂が細い煙を噴くの見れば、あれが身を焚く炎かと思ひ、石の柱に背を凭れて、利鎌の月を見る時は、それも身を斬る刃かと

思つたんです。

お前さん、召しますよ。

えゝ！ さあ、其の時が参りました。一月の中に身體がきれいに成りました、其の翌日の事だつたんです、お仙人は杖を置いて、幾壇も壇を下りて、館を少し離れました、攀上るほどの巖の上へ連れて行きました。眞晝間の事なんです。

天狗の俎といひますやうな大木の切つたのが据置いてあるんです。其の上へ、私は内外の衣を褫られて、そして寝かされました。仙人が、あの廣い袖の中から、眞紅な、粘々した、艶のある、蛇の鱗のやうな編方した、一條の紐を出して絲ほどにも、身の動きませんほど、手足を其の大木に確乎結へて、綿の丸けた球を、口の中へ捻込みましたので、聲も出なくなりました。

其處へ、キラ／＼する金の針を持つて、一睨み睨まれました時に、もう氣を失つたのでございます。

自分に返りました時、兩臂と、乳の下と、手首の脈と 方々に血が浸んで、其處へ眞白な藥の粉が振掛けてあるのが分りました。

翌月、二度目の時に、それでも氣絶はしませんでございました。そして、仙人の

持ちましたのは針ではありません、金の管で、脈へ刺して、其の管から生血を吸はれるつて事を覺えたのです。一時ばかり、其の間の苦痛と云つてはありません。

が、薬をつけられずと、疵あとは、すぐに次の日に癒せて落ちて、蟲に刺されたほどのあとも残りません。

え、そんな思ひをして、雲も雨も、みんな、目の下に遠く見えます、蒼空の高い峰の館の中に、晝は伽をして暮しました。

つい此の頃でございませぬ。思ひもかけず、屋根も柱も揺れるやうな白い風が矢を射るやうに吹きつけますと、光り輝く蒼空に、眞黒な雲が一掴、鷲が落しますやうな、峰一杯の翼を開いて、山を包んで、館の屋根に渦いてかゝりますと、晝間の寢床——仙人人は夜はいつでも一睡もしないのです、夜分は塔の上に乗つて、月に跪き、星を拜んで、人の知らない行をします——其の晝の寢床から當番の女を一人、小脇に抱へたまゝ、廣室に駈込んで來たのですが、皆來い！と呼立てます。聲も震へ、身も慄いて、私たちが二十人餘りを慌しく呼寄せ、あの、二重三重に、白い膚に取圍ませて、衣類衣服の花の中に、肉身の屏風させて、一すくみに成りました。

此が禁厭に成るのを見えます。窓を透して手のやうに擴がります、其の黒雲が、じ

りくくと來ては、引返し、じりくくと來ては、引返し、仙人の背は波打つやうに、進退するのが見えました。が、やがて、凄じい音がしますと、雲の中に、龍の形が顯はれたんです。柱のやうに立つたと思ふと、ちやうど箕の大きに見えました、爪が電のやうな掌を開いて、女たちの髪の上へ仙人の足を釣上げた、と見ますと、天井が、ぱつと飛散つて、あとはたゞ黒雲の中に、風の荒狂ふのばかりを覺えて、まるで現に成つたんです。

村の人に介抱されると、知らない國の、路傍に倒れて居ました。

其處で訊ねまして、はじめで、故郷は然まで遠くない、四五十里だと云ふのが分つて、それから、釵を賣り、帯を賣つて、草樹をしるべに、漸つと日をかさねて歸つたのでございます。

あはれ、此の婦は、そして久しからずして果敢なく成つたと傳へられる。

狐

傳へ聞く、近頃、天津の色男に何生と云ふもの、二日ばかり邸を明けた新情

人の許から、午後二時半頃茫として歸つて來た。

「しかし奥も美人だよ。あの烈しく妬くと云ふものが、恐らく己を深く思へばこそだからな。賣色の輩と違ふ、慾得づくや洒落に其の胸倉を取れるわけのものではないのだ。うふ、貴方はな、とそれ、赫と成る。あの臉の紅と云ふものが、恰是、酔へる芙蓉の如しき。自慢ぢやないが、外國にも類ひあるまい。新婚當時の含羞んだ色合を新しく拜見などもお安くない奴。たゞし嬌瞋火に似たりと云ふのを思つたばかりでも、此方も耳が熱るわけさ。」

と六月の日の照らす中に、寢不足の蒼白い顔を、蒸返しにうだらして、筋もとろけさうに、ふらくと邸に近づく。

唯、夫人の居室に當る、甘くして艶つぽく、色の濃い、唐の桐の花の咲いた窓の下に、ひとりか擲た、たゞず、少年の書生の姿がある。其の人、形容、都にして麗なり、と書いてある。若旦那には氣の毒ながら、書いてあるので仕方がない。

これが植込を遙かに透し、門の外からあからさまに見えた、と見る間もなく、件の美少年の姿は、大な蝶の影を日南に残して、翩然と——二階ではないが——窓の高い室へ入つた。再び説く。其處が婦人の居室なのである。

若旦那は、くわつと逆上せた頭を、我を忘れて、うつかり帽子の上から搔りながら、拔足に成つて、庭傳ひに、密と其の窓の下に忍び寄る。内では、媚めいた聲がする。

「よく來てねえ、丁ど待つて居た處なんですよ、心が通じたんだわね。」

と、舌つたるさも沙汰の限りな、それが婦人の聲である。

若旦那勃然として怒るまいか。あと退りに跳返つた、中戸口から、眞暗に成

つて躍込んだが、部屋の外に震へる釘の如くに突立つて、拳を握りながら、

「りんよ、りんよ、権平、権平よ、りんよ、権平。刀を寄越せ、刀を寄越せ、刀を

。と喚かけたが、権平も、りんも、寂然して音も立てない。誰が敢て此處へ切もの

を持出すものか。

若旦那、地たゝらを踏みながら、

「汝、汝、部屋の中に居るのは誰だ、誰が居るんだ、汝。」

と怒鳴つた。裡に敵ありと見て、直ぐに猪の如く飛込まないのが、しかし色男の身

上であると思へ。

婦人の驚駭は蓋し察するに餘りある。卓を隔てて差向ひにでも逢ふ事か、椅子を

並べて、肩を合はせて居るのであるから、股栗不能聲。唯腕で推し、手で拂つて、美少年を、藏すよりも先づ、離さうとあせり悶えて、殆ど虚空を掴む形。

美少年が、何と飛退きもしよう事か。片手で、尚ほつよく、しかと婦人の手を取つたまゝ、その上、腰で椅子を摺寄せて、正面をしゃんと切つて、曰く此時、神色自若たりき、としてあるのは、英雄が事變に處して、然るよりも、尚更ら驚歎に價値する。

逃げようと思へば、いま飛込んだ、窓もあるのに――

「然うだ。一思ひに短銃だ。」

と扉の外でひき呼吸に眩く聲、彈丸の如く飛んで行く音。忽ち手負猪の襲ふやうな、殺氣立つた聲音が轟々と扉に寄る。剩へ其の扉には、觀世綏の鎖もさゝず、一押しに押せば開くものを、其の時まで美少年は件の自若たる態度を續けた。

然も、若旦那が短銃を持つて引返したのを知ると、莞爾として微笑んで、一層また、婦人の肩を片手に抱いた。

其の間の婦人の心痛と恐怖はそも、身をしばる汗は血と成つて、紅の雫が垂々と落ちたと云ふ。窘も又極つて、殆ど狂亂して悲鳴を上げた。

「あれ、強盗が、私を、私を。」

「何が盗人です、私は情人ぢやありませんかね。」

と高らかに美少年が言つた。

「何だ。強盗だ、情人だ。」と云ひさま、ドンと開けて、衝と入つて、屹と其の短銃

を差向けて、一目見るや、あ、と叫んで、若旦那は思はず退つた。

怪事、婦人の肩に手を掛けて連理の椅子を並べたのは、美少年のそれにあらず。

此がために昨夜も家を開けて、今しがた喃喃として別れて来た、若旦那自身の新情

婦の美女で、婦人と其處に兩々紅白を咲分けて居たのである。

此の美女、姓は胡で、名はお好ちやんと云ふ。

一體、此の若旦那は、邸の河下三里ばかりの處に、流に臨んだ別業があるのを、

元來色好める男子、婦人の張氏美而妬なりと云ふので、浮氣をする隠場處にし

て、其の別業へ、さま／＼の女を引込むのを術としたが、當春、天氣麗かに、桃

の花のとろりと咲亂れた、暖い柳の中を、川上へ細い杖で散策した時、上流の

方より柳の如く、流に靡いて、楚々として且つもの思はしげに、唯一人渚を辿り来た此の

美女に逢つて、遠慮なく色目づかひをして、目迎へ且つ見送つて、何うだと云ふ例の本

領りやうを發揮はつぎしたのがはじまりである。

流水りうすゐ豈あに心こころなからんや。言ことばを交かはすと、祕かくさず名なを言いつた。お好かうちやんの語かたる處ところによれば、

若わか後ご家けだ、と云いふ。若わか旦だん那な思おもふ壺つぼで、親しん族ぞくの男をとこどもが、挑いじむ、颯なぶる、威ゐ丈たけ高たかに成な

つて袖そで褌つまを引ひく、其その遺やる瀨せなさに、くよくよ浮うき世よを柳やなぎ隠かくれに、水みづの流ながれを見るみのだ、

と云いふ。あはれも、そゞろ身みにしみて、春はるの夕ゆふべことばちぎり、朧おぼろ月づき夜よの色いろと成なつて、然しかも

桃もも色いろの流ながれろがねさを棹さしして、お好かうちやんが、自じ分ぶんで小こ船ふねを操あやつつて、月つきのみどりの葉はがくれ

に、若わか旦だん那なの別べつ業げふへ通かよつて來くる、蓋けだしハイカラなものである。

以い來らい、百ひやく家かの書しょを讀よんで、哲てつ學がくを修しゆする、と稱とへて、別べつ業げふに居ゐ續つけして、窓まどを閉と

ぢて、垣かきを開ひらいた。

其そのお好かうちやんであつたのである。……

細さい君くんの張ちやう氏しより、然しかも、五いつつばかり年とし少わかき一いち少せう女ぢよ、淡たん装さう素そ服ふくして婀あ娜だたるも

のであつた。

時ときに、若わか旦だん那なを見みて、露つゆに漆うるししたる如ごとき、ぱつちりとした瞳ひとみを返かへして、額ひたひ髮がみはら

くと色いろを籠こめつゝ、流なが眊しめに莞につこ爾りした。

が、椅いす子を並ならべた張ちやう婦ふ人じんの肩かたに掛かけた手ては、なよくとしつゝも敢あへて離はなさうとはしな

かつた。

言ふまでもなく婦人の目にも、齊しく女に成つたので、驚駭を變へて又蒼く成つた。

若旦那も、呆れて立つこと半時ばかり。聲も一言もまだ出ない内に、霞の色づく

ごとく如くにして、少女は忽ち美少年に變つたのである。

變れば現在、夫の見る前。婦人は身震ひして飛退かうとするのであつたが、軽く撓

柔に背にかかつた手が、千曳の岩の如く、千筋の絲に似て、袖も襟も動かばこそ。おめ

くとして、恥かしい、罪ある人形とされて居る。

知是妖怪所爲。

「退け、射殺すぞ。」

詰寄る。若旦那の手を、美少年の方から迎へるやうに、じつと握る、と其の手の尖

から雪と成つて、再び白衣の美女と變つた。

「忘れたの、一寸……」

で、迂らした白い手を、若旦那の胸にあてて、腕で壓すやうにして、涼い目で熟と見

る。其の媚と云つたらない。妖艶無比で、猶且つ婦人の背を抱いて居る。

と知りつゝ、魂から前へ溶けて、ふらくと成つた若旦那の身體は、他愛なく、ぐた

りと椅子に落ちたのであつた。于二女之間恍惚夢如。

「ほゝゝ、色男や、貴女に馴染んでから丁ど半年に成りますわね。御新造に馴染んでからも半年よ。貴方が私の許へ来て居るうちは、何時でも此方へ来て居たの。あら、あんな顔をしてさ。一寸色男。私と逢つて居るうちは、其の時間だけでも御新造は要らないものでせう。要らないものなら、其間は何うされたつて差支へないぢやありませんか。

ねえ、若旦那、私は貴方は嫌なの。でも嫌だと云つたつて、嫌はれた事は分らないお方でせう。貴方は自分の思つた女は、皆云ふ事を肯くんだと思つて居るもの。思はれるものの恥辱です。

だから、思はれた通りに成つて——其のかはり貴方に差上げたものを、御新造から頂戴しました。可かありませんか。

最う此だけで澤山なんです。「言ふと、齊しく、俄然として又美少年と成つて、婦人の打背く頬に手を當てた。が、すわりと身を抜いて、椅子に立つた。

若旦那、氣疲れ、魂倦れ、茫として手もつけられず。美少年の抜けたあとを、夫

婦相對して目を見合せて、いづれも羞恥に堪へず差俯向く。

頭の上に、はたくと掌を叩いて、呵々と高笑ひするのを、驚いて見れば、少年子、擧手高揖して曰く、吾去矣。

「御機嫌よう、失禮。」

と、變じて狐と成つて、白晝を窓から蝙蝠の如くに消えぬ。

此は教訓ではない、事實であると、本文に添書きがあるのである。

大正三年三月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「みつ柏《がしは》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みつ柏

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>